

〔書言字考節用集一〕乾坤地震動也出奈地震知

〔東雅二〕地輿中又地震をナイフルといふは、太イとは鳴也、フルとは動なり、鳴動の義なり、今

俗にナイユルなどもいふなり、ユルも又動也、ユルグといひ、ユルガスなどいふも亦同じ、上古の

語にユラガシテなど見えし、即此也、

〔物類稱呼一〕地震、ちしん、關東及北陸道にて、ちしんといふ、西國及中國四國にて、なるといふ、

略○下

〔倭訓栞前編十九〕なる 日本紀に地震地動をよめり、鳴居の義にや、又なるふるともよみ、武烈紀

の歌に、なるがゆりこばとも見えたり、俗になるとよべり、癸未の冬關東大地震に通茂卿、

神つ國千代のいはほもゆりするて動かぬ御代のためしをぞひく

西國及中國にて皆なるといふ、地震祭は陰陽家の祭也、

〔日本書紀十六〕太子烈武歌曰、於彌能姑能、耶賦能之魔柯枳始陀騰余彌那爲我與釐據魔耶黎夢之

魔柯枳一本、以耶賦能之魔柯枳、易耶陸智羅智枳、

〔日本書紀二十二〕七年四月辛酉、地震略○下

〔續日本紀三十三〕寶龜四年二月壬戌、地震略

〔日本書紀九十三〕五年七月己丑、地震略

〔秉燭或問珍一〕地震之說

或問云、地震とはいか成物にや、山を崩し海を填、民家を壓倒のみにあらず、人民牛馬の死する事

數をえらす、嗚呼天地の間に、かくあさましき事も有物にや、兒女の說には、鹿島の明神是を歎給

ひ、要石を以て鯨を刺給ふといへり、まことに侍るや、其說を聞ん、

對曰、地震は二氣の陰陽あいだのなす所にして、たま〜はげしき事あれば、家を崩し人を傷

初見

地震說